

聖
光

常磐くじら
証 夕薙

杯



The Holy Grail of Eris

author Kujira Tokiwa

illust. Yu-nagi

試読版

序 章

りん、ごん、と鐘が鳴る。

今日のコニーは悪い子だった。父さまの言いつけを破つて「しょけい」を観に来てしまったのだ。駄目だと言っていたのに、こつそり屋敷を抜け出してサンマルクス広場までやつてきた。しかも、ケイトまで連れにして。

この緑豊かな広場は、普段であればコニー やケイトたちの恰好の遊び場だった。鬼ごっこやかく れんぼ——時には敷地内にある市 庁舎に忍び込んでイタズラをすることもあつたが、気のいい役人 たちから咎められたことはなかつた。だから、平気だと思ったのだ。この場所が、コニーに恐ろし い思いをさせたことなんて一度もなかつたから。

けれど、今日のサンマルクス広場は何かが違つた。

まず、王都中の人間がやつてきたのかと思うくらいのたくさんの人！ こんなに人が集まる行事 なんて、コニーは聖誕祭や星読祭くらいしか知らない。ただ、普段のお祭りと違うのは、皆の目が ぎらぎらとしていることだ。ぎらぎらと、何だかとても嫌な熱を帯びている。

あんな嫌な目をするなんて、やつぱり「しょけい」はよくないものなのだ。コニーは父さまの言

葉を思い出していた。「あれはじんどうにはんするこういだ」珍しく難しい顔をしながら、そう言つ ていた。六つになつたばかりのコニーには、よく、意味がわからなかつたけれど。

りん、ごん、と鐘が鳴る。

押し寄せる群衆に流されて、いつの間にかケイトとはぐれてしまつた。気づいた瞬間、血の気が 引いた。だつて、今日の広場は何かがおかしい。不安になつたコニーは、人の波を搔き分け「ケ イト！」と叫んだが、その声を上回る熱気に押し潰された。どうしよう、どうしよう。焦つたコ ニーはケイトの名を呼びながら人々を搔き分け、搔き分け、進んでいく。

そうして気づいた時には、人だかりの最前列までやつて来ていた。そこはちょうど広場の中央で、 目の前には見覚えのない台座がある。これも、「しょけい」のために作られたのだろうか。疑問に 思つたが、すぐに首を横に振る。それよりもケイトだ。ケイトはどこだろう。

見慣れない台座以外は、いつものサンマルクス広場の光景だった。左手には建国の祖である英雄 アマデウス像が、右手には聖女アナタシア像がある。そして、少し離れたところから広場全体を 見下ろすようにして聳え立つのは聖マルク鐘楼だ。

コニーがケイトを探すために踵を返そうとしたその時、わあつと周囲が沸いた。モルダバイト宮 殿に続く門が開錠され、一台の馬車が広場に到着したのだ。 中から現れたのは、黒いフードをかぶせられた少女と、数人の男たちだった。若い者もいれば年嵩

な者もいたが、皆きちんと正装していた。それに対しても少女の衣装はひどく質素な鼠色のワンピースで、ところどころほつれてさえいる。

彼らが姿を見せるや否や、歎声はさらに興奮したものとなり、それはやがて怒声と罵声に変化した。飛び交うのは、コニーが今まで一度も耳にしたことがないようなおぞましい言葉だ。

異様な空気に足が凍りついて動けなくなる。けれど、ひどい悪意を投げつけられているはずの少女と言えば、まるで気にした様子がなかった。騒ぎ立てる輩には一瞥も寄せざらず、ただまっすぐに前を向いている。

少女は、正装した男たちに先導されて広場の中央にある台座へと進んでいった。つまり、コニーの正面だ。少女が近づいてくる。その両手首には木製の手枷が嵌められていた。

群衆の熱気はいよいよ最高潮に達したようだった。ある者は少女を指差し絶叫するよう声を荒らげ、またある者は手を叩いてげらげらと笑う。

りん、ごん、と鐘が鳴る。

気がつけば、分厚く黒い雲がすぐそこにまで迫っていた。ぱつぱつと雨が地面に点々を描いていく。男のひとりが何かを命じると、少女が氣怠そうに首を振った。ぱさりとフードが取れて、艶やかな黒髪がこぼれ落ちる。そして、ようやつとこちらに顔を向けた。

その瞬間、コニーは息を呑んだ。

見たこともないほど美しい生き物がそこにいたのだ。雪のように白い肌に、熟れた果実のような赤い唇。そして、星を閉じ込めたようにきらきらと光を弾く紫水晶の瞳——

神々しいとはまさにこの人のことを言うのではないか。そう思つたのは、おそらくコニーだけではなかつた。その証拠に、あれほどさかつた野次がぴたりとやんだのだ。

誰も彼もが、魅入られたように少女を見つめていた。食い入るような、そんな不羈な視線に晒されても少女は全く動じなかつた。それどころか、ひとりひとりの顔を確認するかのようにゆっくりと広場を見渡していく。今度は見られた人々の方がたじろいでいくのがわかつた。

少女はわずかに目を眇めると、ふん、と鼻を鳴らした。

それからゆっくりと口を開く。

「呪われろ」

決して大声を張り上げているわけではないのに、その凛とした声音は広場中によく響いた。

「貴様ら全員、呪われるがいい——！」

しん、と辺りが静まり返る。すぐ傍で唾を呑み込む音がした。呪いなどあるわけがない。けれど、それにしてはあまりにも堂々とした態度に動搖が広がつていく。

「ば、売女め！」ふいに誰かが声を上げた。その声はかすかに震えていた。けれどそれが呼び水となり、我に返つた群衆は次々と罵声を投げつけていく。「淫魔！」「悪魔！」「人殺し！」

コニーは恐ろしさに震え上がつた。まだ六つのコニーは人間の悪意というものに慣れていなかつた。どうしていいかわからず、怯えながら視線を彷徨わせていると、例の少女と目が合つた。



宝石のような双眸^{そうぼう}がコニーを捉^{とら}える。幼い子供がいるのが珍しかったのだろうか、彼女はきよとんと眼を瞬かせると、ふと口元を綻^{ほころ}ばせた。笑った——そう、笑ったのだ！

コニーは思わず瞳を見開いた。今度はどきどきと心臓が早鐘を打つ。今のは、なんだ。これは、なんだ。自分は、今、なにかとんでもないものを見てしまったのではないか。これは。これは——少女はどこか満足そうに微笑^{ほほえ}むと、小さく何かを呟^{つぶや}いた。

幸か不幸か、その声がコニーの耳に届くことはなかつたけれど。

雨はいつの間にか勢いを増し、突き刺さるように降つてくる。風が唸る。空はどす黒く渦巻いていり。死刑執行人が少女を跪^{ひざま}かせ、高々と剣を振り掲げる。その時、地面を裂くような爆音とともに何かが光つた。閃光^{せんこう}に、コニーの視界が白く塗りつぶされる。なにも見えない。手を翳^{かざ}して目を細めていると、ぴちゃつと生温いものが頬に飛んできた。それから、むせかえるような鋸^{さざ}びた鉄の匂いが。

ようやつと視界に色が戻つた時には、すべてが終わつていた。剣を持った男が、まあるくて、赤いものが滴り落ちるなにかを掴^{つか}み上げる。群衆から割れんばかりの喝采^{かつぎ}が上がつた。「見ろ、鉄槌^{てつつい}」が下された！「さまあみやがれ！」「死んだ！」「死んだ！」「死んだぞ——！」

コニーは動けなかつた。悲鳴も上げられなかつた。たつた今、目の前で起きたことが信じられなかつた。

誰かが口笛を吹き、周囲がどつと沸いた。つられるように、はしゃいだ声が次々と弾けていく。

歓喜の輪は次第に大きくなつていき——しかし、長くは続かなかつた。

突然、誰かが大声を張り上げたのだ。

「——おい、見ろ、火が！」

指差す先では市庁舎が燃えていた。「落雷だ！さつきの雷が落ちたんだ！」別の誰かが叫んだ。炎がごうごうと唸り声をあげている。一拍の静寂の後、悲鳴が上がつた。逃げ惑う人々が互いを押しのけ、ぶつかり合い、怒号が飛ぶ。

「邪魔だ！」コニーは誰かに突き飛ばされて地面に倒れ込んだ。硬い土に胸が打ちつけられて息がつまる。痛い。痛くて怖い。誰か。だれか、たすけて。だれか、たすけて。

小さな体のどこもかしこもじんじんと痛みを訴えていた。起き上がることもできずに視線だけを上げると、同じように倒れ込んでいる人がいた。黒髪の女性だ。手を伸ばそうとして、ふと違和感を覚える。ない。

首から下が、ない。

無造作に転がつていたものの正体に気づくと、コニーは今度こそ絶叫した。あれは、じんどうにはんするこういだ。父さまの言葉が脳裏^{のうり}をよぎる。ああ——

ぎゅっと目を瞑^{つむ}ったコニーの頭上では、暴風に煽^{あお}られ、りんごんりんごん、と狂つたように聖マルクの鐘が鳴つていた。

第一章 小宮殿にて

グラム・メリル／アン

(ちょ、ちょっと待つて――!)

コンスタンス・グレイルは両頬に手を当てあんぐりと口を開けると、心の中で絶叫した。

陽の落ちた庭園。目の前には抱き合う男女。もちろん恋愛は自由だし、抱擁程度では風紀を乱しているとは言えないだろう。

ただひとつだけ非常に由々しき問題があるとすれば――

それは、どこからどう見ても男の方が己の婚約者であるということだった。

※

ことの発端は数ヵ月前。十一代目グレイル子爵が例によつて誠実であつたために始まつた。

汝、誠実たれ。

隣国ファリスとの十年戦争の功労者であつた初代パーシヴァル・グレイルは、勝利の秘訣を求める際にそう語つたという。それから代々グレイル子爵家のモットーは『誠実』だ。もちろんコンスタンスの父親であるパーシヴァル・エセル・グレイルも御多分に漏れず誠実な当主だつた。い

や、むしろ、誠実すぎた。

例えば、友人に泣きつかれ怪しげな借金の連帯保証人となり、そのまま多額の債務を背負うことになつてしまふほどに。

ちなみにその友人は早々にどこかへと雲隠れし、風の便りも寄越さない。

何度も言うが、グレイル家の家訓は一も二もなく誠実一択。加えて質素儉約。贅沢なんて以つての外で、領地経営で利益が出てもすぐさま領民に還元するのがグレイル流だ。初代パーシヴァル・グレイルから徹底されてきたこの忌まわしき伝統のお陰で、子爵家には余剰な貯えがない。

「――つまり」

事態を一通り説明し終えると、パーシヴァル・エセルは厳めしい顔つきで娘へと向き直つた。コニーも思わずごくりと唾を呑み込む。

「つ、つまり……?」

「つまり、返せる金などない」

グレイル家の命運はもはや風前の灯火であつた。

あのグレイル家が、お金に困つてゐるらしい。

そんな噂を聞きつけて援助の手を差し伸べてきたのは、出入り商人として懇意にしていたダミアン・ブロンソンだった。

「大変なことになつてゐるそうじゃありませんか」

ダミアンは、三代続くブロンソン商会の代表で、自身も准男爵の位を賜っている。

ただし、貴族ではない。

平民よりは優遇されるとはいえ、准男爵では出向ける社交界も限られてくる。ブロンソン商会は王都のアナスタシア通りに本店を構え、地方にもいくつか支店を持つ老舗である。経営は安定している。安定していく——むしろ盤石過ぎて——そこから先が発展しない。だからこそ、欲しいのは新しい伝手だつた。

「まったく旦那様も人が好い。損得勘定をしてくれるような人間でも近くにいればいいんですがね。そうそう、実は私には伴伴がおりまして——」

ダミアンには今年十七になる息子がいた。それがニール・ブロンソンである。

かくして、とんとん拍子に二人の婚約は取り決められた。

「本当にいいのか？」

父から何度も確認されたが、コニー自身は別段この婚約に不満があるわけではなかつた。むしろ、いよいよ首が回らなくなってきた子爵家の長女としては、願つてもないありがたい話である。

見た目こそぱッとしないが、コニーとて一応貴族の娘だ。もちろん恋愛結婚に憧あこがれはある。大いにある。エンリケ殿下とセシリア王太子妃の身分違いのロマンスを綴つづった本はコニーの聖典バイブルだつた。いつもする。けれど、お家の一大事となればそんなもの天秤てんびんにかけるまでもない。

そもそもこの世のすべての人間が恋した相手と結婚できるわけではないのだ。コニーのように十人並みの器量しか持たず、性格だつて大人しく、引っ込み思案の娘なら尚なおさら更だ。

ニール・ブロンソンは、背が高くて、ハンサムで、紳士的な好青年だつた。だから、こんな人があ夫になるならちつとも悪くないとコニーは思つていた。

本当に、そう思つていたのだ。

彼が、婚約者以外の女性に夢中なのだ、という噂を耳にするまでは。

「——パメラ・フランシス？」

「ええ。ニール・ブロンソンは彼女にご執心みたいね。人目を忍んで抱き合つてゐるのを見たといふ人がいるんですって。でも、彼つてあなたの婚約者なんでしょう？」

そう告げられたのはちょうど一週間前。相手は知り合いのご令嬢だつた。

「ニールが、パメラと……」

パメラ・フランシスはたいそう魅力的な淑女レディである。いつも大勢の人に囲まれていて、取り巻きの中には必ず見目麗うるわしい殿方がいる。

彼女がすごいのは、とびぬけた美貌びようを持つてゐるわけではないのに、どうやつたら自分が一番愛らしく見えるかよく知つてゐるところだ。プラチナ・ブロンドのふんわりとした髪はいつも器用に編み込まれてゐるし、夜会用のドレスは必ず、貴族の子女であれば一度は着てみたいと憧れる【月夜の妖精よあやし】という高級洋裁店で仕立ててゐる。

「パメラはね、舞踏会のダンスのようになると男を変えるらしいわよ」

なにそれこわい。コニーは憚おののいた。地味でパツとしない子爵令嬢なんかが敵かなうわけがないではな

いか。

それに、男爵とはいえた領地で採掘される鉱石の取引で成功を収めているフランシス家は、グレイル家とは比べ物にならないくらい裕福だった。プロンソン商会にとつても悪くない相手のはずだ。念願の貴族の伝手だつて手に入るし、それに、もしかしたら鉱石の権利も得られるかもしれない。誠実しか取り柄のない貧乏貴族よりもよほど良い。

そこまで考えると、コニーは天を仰いだ。そうしないと、何かみつともないものが目から流れてしまいそうだったからだ。

こんなこと、父には言えない。言えるわけがない。だってすでにこの婚約は恙なく締結されてしまっている。両親とともに教会での誓約を済ませたのはつい先日のことだ。今は結婚への足踏みと言われる婚約公示期間であり、領地にだつて報せがいっているはずだつた。そんな中での、不貞疑惑、だなんて――

もちろんコニーが異議申し立てを行えば、十中八九、破棄できるだろう。けれど、それでは借金は返せない。それに事が公になれば、どこまでも誠実である父は、間違いなくクローゼットの奥から埃を被つた銃を持ち出し、ニールの足元に白手袋を投げつけるに決まつてゐる。

即ち、どちらかが死ぬ。

(ああ、もう、誰か助けて――)

歳十六にして、コニーの人生はどん詰まりだつた。

※

結局、願いは届くことなくコンスタンス・グレイルは衝撃の現場を目撃することになつたのだが――ひとまず、時はその数刻ほど前に遡る。

「ご婚約おめでとう、グレイル嬢」

「ありがとうございます」

「でもあれよ結婚なんてね、手入れの行き届いた地下牢にぶち込まれるようなものなのよね。とうわけで我らが豚小屋にようこと、生まれたての子豚ちゃん。歓迎するわ」

「……あ、ありがとうございます」

そう言つて、ちつともおめでたくなさそうに祝福をくれたのは一癖あるエマニュエル伯爵夫人。

「あらコンスタンス、あなた婚約したんですつて?」

「ええ、実はそうなんです」

「まあ、まあ! あなたとはそんなに親しくないけれど、ぜひとも式には呼んでちょうだいね!」

「ふふ、嬉しいわ! そうそう、ちょうどブロンソン商会で取り扱つてゐる絹織物が欲しかつたのよね、あの王都限定品のやつ」

「……ええと、その、引出物に用意しておきます……」

いつだつてちやつかりしているのはボーデン男爵夫人。

「ちよつと聞いたわよ、コニー！ あなたの婚約者のニール・ブロンソンって、あのパメラと噂になつてゐる相手じゃないの！ どうしたことなのか詳しく述べなさいよ！」

「むしろ私の方が知りたい」

ちよつぴり図々しくてかなり無神経な子爵令嬢のミレーヌはゴシップが大好きだ。

例の噂を耳にしてから一週間。真相を確かめる勇気も出ないまま、ニールとは絶賛婚約中である。そんな折に招待を受けた小宮殿グラン・メリル・アンでの舞踏会は大盛況だった。

主催者であるドミニク・ハームズワース子爵の機嫌も上々で、芝居がかつた仕草で何度も運命の三女神ミラ・モイ・エリザベスに感謝を捧げていた。ちなみに子爵は貴族の当主としては珍しく聖職者も兼任している。

子爵はもともと五人兄弟の末っ子で、幼い頃から教会に身を置いていたという。けれど成人してから数年もしないうちに、領地での流行り病が原因で親兄弟が呆氣なく死んでしまった。そのため聖職者であつた彼が爵位を継ぐことになつたのだ。

教会での清貧の教えがよほど性に合わなかつたのか、叙爵されてからの子爵は放蕩二昧ほうとうざんまいだつたそうだ。それでも破門されないのは荷馬車いっぱいの寄付金を納めて徳を積んでいるからだと言われ

ている。

ハームズワース家は肥沃な領地を持つ有数の資産家なのだ。

そもそも、そうでなければ、小宮殿グラン・メリル・アンで舞踏会など開けない。

現在、国王夫妻が住まわれているモルダバイト宮殿の広大な庭園内には、ふたつの離宮がある。

ひとつは王太子夫妻の住まうエルバイト離宮。比較的新しく建てられたもので、実用性を重んじており、質素な佇まいたたずまいをしている。

そしてもうひとつが、この国が榮華を誇つたミシエリヌス王の御代に建築された豪華絢爛な娛樂用の小宮殿——グラン・メリル・アンだつた。現代では觀光名所となつており、社交シーズン中は三代以上続く貴族であれば誰でも大広間を貸し切つて舞踏会を開くことができる。といつても莫大な費用がかかる割に制約が多いので、町屋敷を持つ真つ当な貴族たちはまずやらないが。

ちなみに小宮殿グラン・メリル・アンの大広間は、十年前、かの大罪人スカーレット・カステイエルがエンリケ殿下にその罪を糾弾された舞台でもあつた。

その際にスカーレットとの婚約を破棄し、當時まだ子爵令嬢であつたセシリア王太子妃との婚約を宣言したとされていることから、ここは今や王都有数の愛の巡礼地のひとつになつてゐる。

蠟燭のゆらめきを受けて、豪奢なシャンデリアが広間にきらびやかな明かりを灯す。中央に集まつた招待客たちは、樂士たちの奏かなでる音楽に合わせて陽気なステップを楽しんでゐる。四隅には軽食のスペースが設けられ、そこではコニーを含め、踊りに参加しない者たちがカクテル片手に優

雅に談笑していた。

「おめでとう、コンスタンス」

「ありがとうございます」

すでに婚約が公示されているせいか、祝福を告げにやつてくる知人が後を絶たない。けれど、そのすべてに笑顔を貼りつけて対応するのはさすがに骨が折れた。見知った顔への挨拶回りは終わつたはずだ。ちょっと一息ついても許されるだろう。別のテーブルで紳士連中とカードゲームに興じていたニールも先程から姿が見えないので、彼もどこかで休んでいるに違いない。

コニーはこつそりと大広間を離れると、開放されていた温室に出た。

白い木枠で縁取られた全面ガラス張りの室内では、物珍しい南方の花や、異国の植物が育てられている。天井までもがガラスで出来ていて、頭上では煌々と星が瞬いていた。どこかの窓が開いているのか、ひんやりとした外気が火照つた肌を撫でていく。

——馬鹿だと笑われるかもしれないが、実のところ、コニーはまだニールを信じていた。

よくよく考えてみれば、すでに教会で宣誓を行い、婚約公示までしているのだ。本当にパメラを愛しているのならば、その前に何か行動を起こすだらう。

それに、ニールの態度だって普段通りだつた。普段通り、コニーに優しかつた。今日だつてドレスが似合うと褒めてくれた。そもそも、当人から直接聞いたわけではない。噂だけを鵜呑みにするのはいささか誠実さに欠けるのではないか。

ニールは今日も馬車を用意して迎えに来てくれたし、エスコートだつてしてくれた——

たぶん、この噂はただの勘違いなのだ。もしくは根も葉もないでたらめ。そうだ。そうに違いない。そう思うと、少し気分が晴れてきた。今なら超高速ワルツだって三倍速で踊れそうだ。

大広間に戻る前に窓を閉めておこうと風の出入り口を探す。すると窓ではなく、庭園に続く扉がわざかに開いているのだと気がついた。近づけば、ガラスの向こう、夜に沈み込む庭園の茂みに人影がふたつ見える。なんだろう。じつと目を凝らして——コニーは思わず悲鳴を上げた。心の中で。(ちょ、ちょっと待つて——！)

目の前で抱き合っていたのは、どちらもコニーが良く知る相手だつたのだ。そして、今、最も見たくない組み合わせでもあつた。

ニール・ブロンソンと、パメラ・フランシス。

呆然と立ち尽くすコニーに気がついたのは、パメラの方だつた。ニールと仲良く睦み合つていた彼女は、視線を感じたのかふとコニーのいる方に顔を向けた。野外とはいえ宮殿内だ。外灯は整列するように等間隔に並んでいる。コニーには、パメラの薔薇のよう上気した頬の様子まではつきりと見えた。目も合つた。ぜつたに合つた。けれど不貞を働いたはずの当人はなぜか平然としていて、逆に堂々とコニーを見返してくる。挑発するように口の端が吊り上がつた。

それから彼女はニールの首に腕を回すと、ゆっくりとその顔に唇を寄せていったのだつた。

——なんてこつたい。

温室から大広間につながる廊下。見事な装飾が施された大理石の柱に腕をついて、コニーはがつ

くりと頃垂れていた。

(あんなものを見せられて、いつたいいどうしろと)

大衆向けの恋愛小説あたりだと、浮気女に「この泥棒猫！」と叫んで往復ビンタするか、浮気男に包丁を突きつけて「あなたを殺してあたしも死ぬ……！」と詰め寄るのが定石なのだが、コニーのsuchな初心者には些々かハードルが高すぎる。

おそらくニールの方は浮気現場を見られたことに気づいていないと思うが――

「み、見なかつたことにしたい……」

どうせ恋愛結婚ではないのだ。向こうは貴族の伝手、こちらは借金の返済。そこに愛なんてないのは端からわかつていたはずだつた。

「そりやあ、ちょっとはときめいたりもしたけど。だつてハンサムだつたし。優しかつたし。でもきつとあれは小匙一杯分くらいの――ううん、小指の爪先ほどのときめきだつたはず。だから別に、こんなのたいしたことないし、ぜんぜん、傷ついてなんて、ないし……」

結婚する事情が事情だけに、余計な波風は立てたくない。けれど。

「でも、このまま黙つているつていうのは、誠実な対応じゃないかもしれない……」

汝、誠実たれ。それがグレイル家のモットーなのである。

不貞の現場など見なかつたことにしたいが、これから伴侶としてニールと誠実な関係を築くためには腹を割つて話す必要があるような気もする。

それに、責めを負うのはニールの方だ。間違つても、あちらから婚約破棄してくるなんてことに

はならないだろう。そんな不誠実な事態になるのは、あの悪名高いスカーレットくらいだ。

――スカーレット・カスティエル。恋敵であったセシリア・リュゼ子爵令嬢に対する数々の嫌がらせに加え、彼女の暗殺まで企てた希代の悪女。そのあまりに非道な振舞いから、婚約破棄のみならず、処刑までされることになつたのはあまりにも有名な話だ。

コニーの場合とは、ぜんぜん、違う。

「……よし」

とりあえず、話し合おう。話して決めよう。そうしよう。

それが一番誠実なはず、とコニーが覚悟を決めて顔を上げた次の瞬間。

「――ひいっ!?」

いつの間にか、目の前にひとりの少女が立つっていた。

考えに没頭していたせいだらうか、気配などこれっぽっちも感じなかつた。年の頃はおそらくコニーとさほど変わらない。少女は、コニーではなく、音楽や笑い声が漏れてくる広間の方をじつと見つめていた。その表情はどことなく虚ろである。

「あのう……」

どうかされましたか？ そう訊こうとして、はつと息を呑んだ。少女の容貌が、ひどく美しいことに気づいたからだ。

艶やかな黒髪。肌は穢れのない初雪のように白く透き通り、その肌を包むドレスは燃えるような深紅だ。

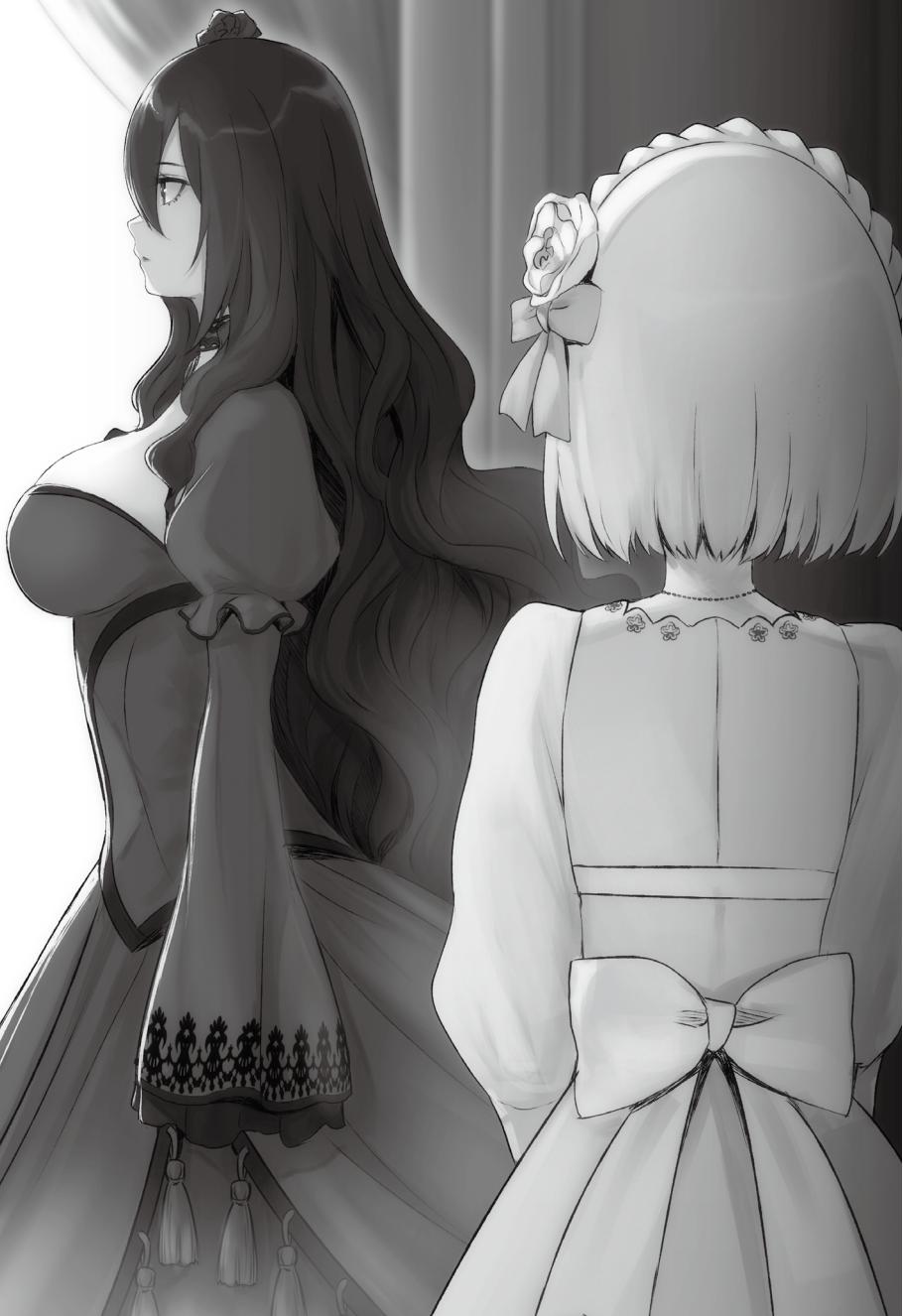
そして、宝石のような瞳は見事なまでの紫水晶だった。この国では紫の瞳は王家の色とも言われている。王族に多いのだ。コニーは思わず現王族の系譜を思い浮かべたが、該当する年頃の王女はいなかつた。それ以外で紫、もしくはそれに近い色を持るのは、王族が降嫁してくるような大貴族に限られる。つまり、どちらにせよ、この少女はかなり高貴な身分ということだ。

確かに——とコニーは大広間での参加者を振り返る。確かに、今日の招待客には侯爵以上はいなかつたはずだ。金が喰るほどあるとはいえ、ハームズワースは子爵家だ。王族主催の大規模な夜会でもない限り、上位貴族と下位貴族の社交場には隔たりがある。今回招待されたのもだいたいが子爵や男爵だった。伯爵にしたって、堂々と参加しているのは変わり者のエマニュエル夫人くらいである。けれど、下賤な夜会を好む貴人というのは一足数いるものだ。身分の高い彼らは主催者を通して、下位貴族や准貴族の集まりにお忍びでやってくることがある。

「あの……わたくし、コンスタンス・グレイルと申します。失礼ですが、ご気分でも？ よろしければ、人をお呼びしましょうか？」

「あの言つて少女に近づいたコニーは、ぱつと頬を染めて視線を彷徨させた。

深紅のドレスは大きく襟ぐりが開いており、柔らかそうな胸元が露わになつていたのだ。おそらく己とそつ変わらぬ年だというのに、この少女が醸し出す得も言われぬ色気はなんだ。そもそも、昨今のドレスの流行は貞淑を強調する露出を控えるタイプなのだ。そう考へると少し古いデザインのはずなのに全く野暮やばくなつた。それどころか、この気の強そうな美貌を持つ少女にび



たりと嵌まっている。下品さなど微塵もなかつた。そこにあるのは圧倒されるような美しさだけだ。

この子が大広間に降り立つて一度でも微笑めば、おそらくそれだけで今年の流行が変わるだろう。

『……楽しそうね』

食い入るように少女を見ていたコニーは、その声に、はつと我に返つた。彼女の視線はまだ大広間に向けられていた。

「入らないのですか？」

当たり前のように訊ねれば、きよとん、と顔を傾けられる。

『入つて、よろしいの？』

「へ？」

今度はコニーが首を捻る番だつた。

「もちろんですよ」

むしろ、よろしくない理由がない。

どうぞ、と手のひらで広間の方を示すと彼女はふらふらと足を進めた。その様子はどうにも危なつかしい。

少女はそのまま廊下と大広間の継ぎ目を踏むと、急に立ちどまつた。

『……はいれた』

そりゃあ、入れるだろう。

けれど、それが心底驚いたというような声だったので、コニーはいよいよ不審に思つた。カクテ

ルの飲み過ぎかと思つていたが、もしや禁止されている幻覚剤の類でも――？
ふふふ、と鈴を転がすような声がした。

『――お前、礼を言うわ』

ぱつとこちらを振り向いた少女の顔には、満面の笑みが広がつてゐる。

あまりにも鮮やかなそれに見惚れてゐる間に、彼女は軽やかな足取りでホールへと消えていつた。残されたコニーはぼつりと呟く。

「お、おまえ……？」

その口ぶりはまるで女王様である。やはり、高貴な方のお忍びだつたのだろう。

大広間に戻つたコニーは、大皿から搔つ攫うようにして焼き菓子を口に放り込む。やけ食いである。ニールの姿はまだ見えない。ついでにパメラも。気づいたら皿は空になつてゐた。なので、迷わず次の皿に手をつける。

口いっぱいにすみれの砂糖漬けを頬張つてゐると、おずおずと祝いの言葉をかけられた。振り返れば、そこにいたのは男爵令嬢のブレンダ・ハリスだつた。コニーは、ごくん、とすみれを飲み込んだ。意外な人物の登場に思わず目を丸くする。

ブレンダは、パメラ・フランシスの取り巻きのひとりだ。気が弱くて、いつもおどおどしながらパメラの顔色を窺つてゐる。

定型の挨拶を終えると、ブレンダは明らかにほつとしたようにそそくさと踵を返した。そんなに

嫌なら来なければいいのに。実は律儀な人間だったのだろうか？ 何気なくその背中を目で追つて、コニーは「あつ」と声を漏らした。

「ブレンダ、あなた、髪飾りが取れそうよ」

そう告げれば、ブレンダはぎくりと体を強張らせた。けれどコニーは気にしなかつた。近づいて、後頭部を指差す。

「ほら、髪もほつてきてる。飾りが落ちたら大変だわ」

「そ、そ、ね」

「いつそのこと取つてしまつたら？」

ブレンダはか細い声で「そうするわ」と呟いた。それはそれは悲壮な声だった。髪が乱れるのが、そんなに嫌なのだろうか。

「ちょっと触つてもいい？」

コニーの提案に、ブレンダはあからさまに肩を震わせた。心外である。別に取つて食いやしない。少し悩んでからおずおずと頷いたブレンダの栗毛色の髪を、コニーは手早くまとめ直した。

「ほら、こうすれば髪飾りがなくても可愛らしいわ」

励ますように告げれば、とうとうブレンダは泣き出しそうな表情になつた。ますますわけがわからぬ。どうしていいかわからずに困つていると、彼女は俯いて、絞り出すような声を上げた。

「あ、あの、私、バッグを二階に置いてきてしまつて。すぐに取つてくるから、それまで、こ、この髪飾りを、持つていて、もらえるかしら」

「ええ、もちろん。お安い御用よ」

ちょうどコニーは夜会用の小物入れボーチを持っていたため、ふたつ返事で了承する。

ブレンダから手渡されたのは、花飾りが施された金地に白いパールが連なつた華奢な髪飾りだつた。壊してはいけないとハンカチに包み、そつと中にしまう。ブレンダはこちらを振り返りもせずに階段を上がつていつた。なんなのだろう、あれは。

暴食のせいで口の中がすっかり甘くなつてしまつた。近くにいた給仕から紅茶を受け取ると、ふと視線を感じてコニーは顔を上げた。そこにいたのは何度か夜会で見かけたことのある小柄な青年——ウエイン・ヘイスティングだ。どうやら今のやり取りを見ていたらしい。同じ下位貴族なので面識はあるが、言葉を交わすほど親しくはない。軽く会釈すると、あちらも会釈を返してきた。

いつの間にか明るくテンポの良い曲は終わり、今はゆつたりとした調べに合わせて男女が輪を描きながらくるくると踊つている。

ブレンダはまだ戻つてこない。ほんやりと二階へと続く螺旋階段らせんを見上げていると、そこから颯爽と姿を現したのはパメラ・フランシスだつた。その傍らにはニールと、俯いたままのブレンダがいる。

「コンスタンス・グレイル！」

パメラは広間に聞こえるような甲高い声を上げた。

「あなた、とんでもないことをしてくれたわね——」

いつたい何事かと、周囲の視線が一斉にこちらを向く。パメラがひどく満足そうに口の端を吊り上げた。

「あなたの家が大変なことは知っているわ。でも、だからと言って、これはちょっとやり過ぎではなくて？」正直、品性を疑うわ」

言葉を向けられたコニーにも注目が集まっていく。慣れない状況に、思わず上擦った声が飛び出た。

「な、なんの話？」

「あら、とぼけるつもり？ でも無駄よ。——あなた、ブレンダの髪飾りを盗んだでしょう」

——ブレンダの髪飾りを、盗んだ？

いつたい何の話をしているのだろう。けれど、敵意と悪意を向けられているのだけは痛いほどわかつて、コニーの心臓がどくどくと早鐘を打つ。

「ブレンダから聞いたわ。髪がほつれそうだから直してあげると言つたそうね。でも、それからすぐ、ブレンダは大事な髪飾りがなくなっていることに気づいたそよ。ねえ、コンスタンス・グレイル。そのことについて、あなたはどう思つて？」

「どう、って」

「希少なイエラ海の涙真珠と、純金の髪飾りだもの。お金に困っている人間にとつては咽喉から手が出るくらい欲しいものよね。ええ、ええ、気持ちは痛いほどわかるわ。あなたのお家のかわいそなご事情はよく知つているもの」

「わ、私は、ブレンダに頼まれて……」

「頼まれて？ そう、あなたは盗んでいないと言うのね？」

事情を話したいのに矢継ぎ早に言葉を投げつけられて、答えるだけで精一杯になる。

「そうよ、だつて——」

「なら、そのポーチを見せなさい」

「え……？」

「盗んでいないと言うのなら、見せられるはずよね？」

コニーは思わず怯んだ。怯んでしまった。だつて、中には、ブレンダの髪飾りが入っているのだ。そしておそらく動搖が顔に出た。今まで怪訝そうにしていたニールがわずかに目を見開く。

「コンスタンス、君、まさか」

「違う！」

コニーは叫んだ。けれどその手から強引にポーチが奪われる。違う、違うのに。パメラがポーチをひっくり返してテーブルの上に中身をぶちまけた。がしゃん、と硬質な音がする。あらやだ、と大袈裟な声がした。

「ねえ、コンスタンス・グレイル？ あなたは盗んでないと言つたけど、これはいつたいどういうことかしら。きちんとご説明頂ける？」

ハンカチから金の髪飾りが顔をのぞかせていた。それを見て、ニールが黙り込む。周囲の人々が、ひそひそと何事かを囁き合つた。

違う。コニーは盗んでなんていない。ぐるぐると熱いものが咽喉までせりあがつてくる。堪える

よう、ぐつと拳を握り込んだ。

「……ブレンダから、頼まれたのよ」

そうだ。コニーは、やましいことなどしていない。

けれど、パメラは残酷だった。残酷に、コニーを追いつめていった。

「頼む？ 見たところ、これは特別嵩張るものでも壊れやすいものでもないようだけれど。それなのに、わざわざ持っていてと頼まれたの？ ブレンダに？ たいして親しくもないあなたが？ それは、はずいぶんと不思議なお話ねえ」

同意するかのよう、どこからともなく嘲笑が上がった。疑われているのだ。かつと体が熱くなれる。コニーはたまらず声を荒らげた。

「——ブレンダ！」

びくり、とブレンダが体を震わせる。

「お願い、言つて！ あなたが私に頼んだのよね？ ポーチを取りに行く間だけ預かって欲しいつて。そうよね、ブレンダ？ ……どうして、黙つているの？ ブレンダ、ねえ、ブレンダつてば……！」

コニーが問いかける度にブレンダは背中を丸め、どんどん縮こまつっていく。

「——言い訳は見苦しいわよ」

ふいに聞こえてきたその声は、恐ろしいほど慈愛に満ちていた。

「かわいそうに、ブレンダつたら怯えているじゃない。いいのよ、ブレンダ。何も言わなくていい

の。……ほら見たでしよう、ニール。こういう女なのよ」

パメラはそう言つて、ニールの腕に甘えるようにしなだれかかった。

「すぐにでも婚約の異議申し立てをすべきだわ。これは、れつきとした犯罪行為よ。結婚なんてしたら、ブロンソン商会の信用にかかわるもの」

ニールは戸惑つたようにコニーと髪飾りを見比べていた。

「だが、証拠もないのに……」

「証拠？」

パメラはせせら笑つた。

「そんなの、ここにいる人みんなが証人になるじゃない！ ああそだわ、ここには聖職者のハムズワース子爵がいらっしゃったわね。何なら今申し立てをしてしまえばいいのよ。——どなたか子爵を呼んできていただけないかしら？」

「違う、私は盗んだりなんて……！」

その言葉に、パメラがコニーの方へと顔を向けた。軽蔑したように、吐き捨てる。

「何が誠実のグレイルよ。あなたなんてただの泥棒じゃないの」

「ちが——」

あまりの衝撃に、息ができない。助けを求めるように広間を見渡す。けれど返つてくるのは、蔑むような冷たい視線だけだった。そんな中、青ざめたウェイン・ヘイスティングと目が合つた。あの時、彼も見ていたはずだ。思わず縮るように見つめれば、さつと視線を逸らされた。面白いこと

には関わりたくない、その顔に書いてある。

ぐらり、とコニーの視界が揺れた。

——だれか。

あの場には他にも人がいたはずだった。見知った顔もいくつかあった。けれど、その誰もが口を閉ざしてコニーを見捨てた。

——だれか、たすけて。

じわりと涙が滲む。咽喉の奥が熱い。わかっている。わかっているのだ。けつきよく誰も助けてくれない。コニーのようなちっぽけな人間をわざわざ助ける人などいない。

『——いいわよ』

その声は、唐突にコニーの耳元に落ちてきた。

「……え?」

鈴が転がるような軽やかな少女の声。この声は、どこかで聞いたことがある。それも、つい今しがた。

『助けてあげる』

愛らしい口調は、傲慢で、不遜で。けれど、どうしてか惹きつけられて。

『でも、その代わり——』

コンスタンス・グレイルは、その言葉を最後まで聞くことができなかつた。なぜなら突然ぱんつと何かが体に飛び込んできて、コニーの意識はそこで一旦途切れたからだ。

※

この女は、誰だ。

目の前で底の知れない笑みを貼りつけたコンスタンス・グレイルを見て、パメラ・フランシスは背筋を凍らせた。

この地味な少女は、ついさっきまでパメラにとつて取るに足らない小者に過ぎなかつた。どこもかしこもパツとしないくせに、誠実などという世迷言を堂々とひけらかす、おめでたい女。他の令嬢だつたら揶揄^{やうよ}されるような幼稚な振舞いも、グレイルの人間だからと許されるのが昔から気に食わなかつた。その上、婚約者はあのニール・ブロンソンだ。背が高く、ハンサムで、まるで舞台役者のように輝いていた青年。

どうしてあの女ばかり優遇されるのだ。コンスタンスなんて、その見た目も、実家の資産も、パメラよりもずっと下の人間のくせに。だから、潰^{つぶ}すことに決めたのだ。

——ブレンダ・ハリスを呼びつけたのは夜会が始まる直前のことだつた。

「そ、そんなことができないわ」

パメラの計画を聞かされたブレンダは、顔を引き攣^{つる}らせるに弱々しく首を振つた。

「じゃあ、マディみたいになつてもいいのね？」

すつと目を細めれば、今度はひつと悲鳴が上がる。

マディ——マディソン・スコットは、去年までパメラの取り巻きのひとりだった。陰気なブレンドと違い、明るくて頭の回転もそこそこ良かったのでパメラのお気に入りだったのだけれど、たまたま他の友人にパメラの悪口を言つているところを聞いてしまつた。

それからかわいそうなマディはパメラの玩具になつた。彼女はたつたの数カ月程度で心を病んで、今は領地で静養している。

がたがたと震えるブレンダに近づくと、頭につけられた髪飾りを思い切り引っ張つた。きれいに結われた髪が乱れる。ブレンダが怯えた目でパメラを見てくる。その目の奥をじっくりと覗き込みながら、パメラは命じた。

「ねえ、ブレンダ。何度も言わせないで？ 私だつて、何も無理にとは言わないわ。そうね、もしも——もしもコンスタンスがあんたのみつともない髪について何も言わなければ、そのまま帰つてきてもいいわよ」

ブレンダは何度も頷いた。いち縷の望みだと思ったのだろう。けれど、それはあり得ない。ブレンダには悪いが、相手はあのコンスタンス・グレイルだ。

地味でぱつとしない彼女が、反吐へどが出るほどの偽善者だということをパメラはよく知つていた。

——知つていた、はずなのに。

「泥棒、ねえ」

パメラの計画は順調だつた。ブレンダは予定通り髪飾りをコンスタンスに預け、パメラが広間の中央でそれを糾弾する。誰もがコンスタンスを見ていた。コンスタンスを疑つていた。がくせん愕然にらとしたコントラストが力尽きたようすに俯いて——そして、再び顔を上げた時には何かが違つていたのだ。

その何かが、いつたい何なのかはパメラにはわからない。けれど。

「ふふ、いつたい、どちらが泥棒なのかしらねえ」

あのコンスタンス・グレイルが、こんな風に、底意地悪く笑える女だとは知らなかつた。

「……どういう意味よ」

余裕のある、嫌な笑い方だつた。追いつめているのはこちらのはずなのに、どうしてか追いつめられているような気持ちになる。それが不愉快で仕方なくて、パメラは目の前の少女を睨みつけた。

しかしコンスタンスはまるで気にした様子もなく、にっこりと微笑むとよく通る声でこう告げた。
「ねえ、ご存知？」あなたが茂みではしたなく腰を振つていたお相手は、わたくしの婚約者様なのよ？」品のない発言に周囲がどよめき、かつとパメラの頭に血が上つた。よくも——よくもこんな大勢の前でそんなでたらめを！

「そんなことしてないわ！ ニールとは口づけをしていただけよ！ あなたつて、なんて無礼なの！ 恥を知りなさい！」

「パメラ！」
焦あせつたようなニールの声にパメラははつと我に返つた。しまつた。嵌められた。コンスタンス・

グレイルなんかに！

コンスタンスは意地悪く口の端を吊り上げた。

「あらやだ、言い間違えたみたい。そうね。あなたは、ただ、口づけをしていただけだつたわね——他人の、婚約者様と。でも、それって立派な泥棒でなくて？」

ふたりの関係は周知の事実であったが、噂のままであるのと、当人が認めてしまうのでは話が違つてくる。それも、こんな無様な形で。明日にでもパメラ・フランシスはうつかり口を滑らせた間抜けな女だと噂になることだろう。屈辱に唇が戦慄く。けれどまだ負けたわけではない。痛み分けだ。いや、むしろ傷を負うのはコンスタンスの方だ。

「……それでも、あなたがブレンダの髪飾りを盗んだ事実は変わらないわ」

犯人はそちらの方だと指摘すれば、先程までの狼狽ぶりが嘘のようにコンスタンス・グレイルはあつさりと肩を竦めた。それから視線をぐるりと巡らせると、ある一点で留める。

視線の先にはひとりの青年がいた。

「ねえ、その——ちょっと待つて今記憶をたどるから——そう、ウエイン。ウエイン・ヘイスティング！」

聞き覚えのある名前に、パメラは小さく舌打ちをする。なんて間の悪い奴なのだ。あの瘦せつぽちは相変わらずパメラを苛々させることが上手だ。

ウエイン・ヘイスティングは、その昔、パメラが取り巻きとともに苛めていた相手だつた。

「あなた、見ていたわね？」

「ほ、僕は——」

そばかすだらけの顔が、窺うようにパメラを見てくる。もちろん、喋つたら承知しない。すっと目を細めれば、ウエインはびくりと肩を震わせて俯いた。そして、それきり黙り込む。

コンスタンス・グレイルはその様子をじつと見つめていた。

「——そう。言いたくないのなら、けつこうよ。けれど、気をつけることね。あなた以外にも真実を知る者はたくさんいてよ？」

そして楽しそうに目を細めると、ゆつくりと広間を見渡していく。

「わたくし、こう見えて記憶力がとつてもいいの。——スタン子爵夫人にプロワ男爵令嬢、それにペラム士爵もいたわね。あとは——この子は名前を知らないみたいだけど、レモン色のドレスのあなた。そう、あなたよ。あの時、こちらをご覧になつていたわね？　ええ、いいわ。いいわよ。皆様、何もおつしやらなくて大いにけつこう」

突然名指しされた面々は驚いたように目を見開き、それから、すぐにばつが悪そうな表情を浮かべた。

「だつてこんなお粗末な茶番、調べればすぐに片がつくもの。ただね、わたくし、煩わしいのが大嫌いなの」

そう言うと、コンスタンスはその表情と口調をがらりと変えた。
「だから、もう一度だけ訊くわよ。——ウエイン・ヘイスティング。下を向いていないで、わたくしを見なさい」

そこにはいたのは平凡な小者ではなく、圧倒的な存在感を持つ何かだった。まるで心臓を驚撃みに

されたような感覚に陥つてパメラは思わず身を震わせた。ウエインも小さく息を呑んでいる。

「今のあなたの紳士らしからぬ振舞いを見たら、お母様はさぞお嘆きになることでしょうね。それでもよろしいの？」

とうとう耐えられなくなつたのだろう。今にも泣き出しそうな表情を貼りつけたまま、ウエイン・ヘイステイングはのろのろと顔を上げた。

「よくできたわね」そう言つて、コンスタンスが満足気に口角を持ち上げる。

「ねえ、ウエイン？ あなたとは今後も良いお友達でいたいと思うのだけれど、あなたはどう思つて？」

友達も何も、コンスタンスとウエインは単なる顔見知り程度だったはずだ。だというのに、その自信に溢れた態度に胸騒ぎがして、パメラは小さく唇を嚙んだ。

「たとえば、無実の人間を冤罪に陥れることは許されることなかしら？」

いつの間にか、広間は静まり返つていた。

「なら、その事実を知りながら保身のために沈黙を選ぶ人間は？」

彼女は詰うように次々と言葉を紡いでいく。

「わたくしはね、こう思うの。そんな人間は地獄に落ちるだろし、見て見ぬふりをしていた者も同罪だつて。ねえ、ウエイン、想像してみて？ もしも真実がつまびらかになった時、あなたはどんな立場になつて、どんな風に噂されてしまうのかしら——」

ウエインは明らかに動搖していた。視線が泳ぐ。そして、もう一度パメラの方を見ようとして——

「……み、みた」
その瞬間、コンスタンスが破顔した。それは、完全な捕食者の笑みだった。
その言葉に、ウエインは、はつと前を向いた。視線の先には、コンスタンスがいる。衣装も化粧も地味なくせに、なぜか得体の知れない威圧感を放つてゐる。気弱なウエインは次第にその圧力に耐えられなくなつたのだろう。顔色が真っ青を通り越して真っ白になつていく。それから、とうとう震えながら口を開いた。

「……み、みた」
その瞬間、コンスタンスが破顔した。それは、完全な捕食者の笑みだった。
「僕、み、見ました。ミス・グレイルは盗んでない。ただ、ブレンダの乱れた髪を直してあげていただけだ。そ、それに、ブレンダは、髪飾りをミス・グレイルに預かっていて欲しいって言つたんだ……！」

——あの役立たず！ パメラの目の奥が怒りでチカチカと瞬いた。周囲の目がなければ、ウエイン・ヘイステイングのそばかすの浮いた頬を引つ叩いてやるところだった。

「わ、私も聞きました」
厄介なことに、レモン色のドレスの女もか細い声を上げた。すると「わたくしも見ていたわ」「私も聞いたぞ」「その子の言う通りだ」「髪飾りを手渡していたのも見た」と次々に声が上がつていく。なんなのだ、これは。

今度は猜疑の眼がパメラに向けられた。なじるように突き刺さつてくる周囲の視線に足が竦む。こんなはずじやなかつた。こんなはずでは。ニールまでもが腕を組んで難しそうな顔をしてくる。

「本当なのか、パメラ」

「ち、違うのよ。だって、だって、ブレンダが——そうだわ、ブレンダが私に嘘を……！」

こうなつたらブレンダのせいにするしかない。パメラは何も知らず、ただ助けを求める友人のために動いただけだ。そうよね？ とブレンダに視線を向けると——

「——かわいそうに、ブレンダつたら怯えているじゃない」

それは、どこかで聞いたような言葉だった。見れば、コンスタンス・グレイルが慈愛に満ちた微笑をブレンダに向けていた。

相変わらず、地味でパッとしない顔。なのに、どういうわけか、ひどく美しく見えた。ブレンダも魅入られたようにコンスタンスを見つめている。

「いいのよ、ブレンダ。何も言わなくていいの」

コンスタンスは、先程のパメラの台詞を一言一句間違えずに繰り返した。

ブレンダの瞳から涙があふれ、頬を伝う。パメラは、ぐつと唇を噛みしめた。もはや勝敗は、火を見るより明らかだつた。

「——これは、いったい何の騒ぎかな」

でっぷりと肥えた腹を揺らしながら螺旋階段を降りてきたのは、今宵の夜会の主催者であるハーモズワース子爵だった。どうしてここに、と思ったが、ほんの少し前に自分が呼びに行かせたのだとパメラは思い出した。

「やだ、成金豚だわ」

コンスタンスが何か呟いたが、生憎内容までは聴こえなかつた。

すぐに何人かが子爵に近づいて、事の次第を面白おかしく説明したようだ。子爵はいちいち大袈裟に目を見開き、肩を竦め、嘆いてみせる。一通り聞き終わると、同情するように眉を下げてコンスタンスに向き直つた。

「災難だつたね、グレイル嬢」

対するコンスタンスはどこか冷ややかな笑みを浮かべていた。相手を見下すような、パメラがこれまで一度も見たことのない表情だ。

「——ええ、とっても。あまりの仕打ちに神聖なる宣誓に背いてしまってどうですわ。背教者になる前に女神の慈悲に縋りたいのですが、ご相談に乗つて頂いても？」

「それは婚約の異議申し立て、ということかね」

「受理されるでしようか」

「もう公示されてしまつているから、すぐには難しいだらうね。相手方の言い分もあるだらうし」

「哀れな仔羊に、祝福を与えてはいただけないのですか？」

「私がかい？ もちろん、そうしてあげたいのは山々だけどね。残念なことに私は教区が違うし、そもそも、異議申し立てはこんな場所で簡単に行えるものではないんだよ。然るべき場所で、きちんと順序立てて行わない。知つての通り、教会というものは不可侵なのだ」

それはそだらう。さすがにパメラだつて、まさかこの場で手続きができるとは思つていなかつ

た。子爵を呼んだのは、ただあの女に恥をかかせてやりたただけだ。まあ、愛想を尽かせたニールが明日にでも本当に異議申し立てを行つてくれれば、とは思つていたが。教会というものは、たかが下位貴族の一存でどうこうできるものではないのだ。だから、次に聞こえてきた言葉にパメラは己の耳を疑つた。

「そんなこと、わたくしの知つたことではないわ」

——この女は、今なんと言つた？

「お前の夜会で起きた不始末よ。お前がなんとかなさい」

それは、他人に命じることに慣れ切つた口調だつた。けれど、目の前にいるのはあのコンスタンス・グレイルなのだ。広間が再びざわつき始める。

「決して難しいことではないはずよ。特に、お前みたいな人間にとつてはね。御託ごたくは良いからさつさとこの婚約を無効にしてきなさい、この愚図ぐずが。さもなければ——」

決して大きいわけではないのに、その声は、はつきりと広間に響き渡つた。

「今宵、この小宮殿グラン・パリル・アンで行われたドミニク・ハームズワースの夜会は、崇高なる王家の庭で男女が入り乱れいかがわしいことをするものだつたと、どんな手を使ってでも陛下の耳まで届くようにし



大広間は、今やコンスタンス・グレイルのためにあつた。あれほど侮辱を受けたはずのハームズワース子爵は、なぜか目を輝かせてすぐさま侍従に何かを命じた。まさか本当に婚約破棄の手続きでもさせるのだろうか。

パメラは必死に考えを巡らせた。どうにかして事態を挽回しなければいけなかつた。そうしないと明日からパメラには社交界の居場所がなくなる。

ニールはおそらく役には立たないだろう。いくらお洒落で、ハンサムで、頭が良くても、彼はやはり貴族ではなかつた。この展開についていけず、そして、これから待ち受けの事態にも気づかず立ち尽くしている。

「——紳士淑女の皆様方」

いつも壁の花で、人前では気の利いたことひとつ言えなかつたコンスタンス・グレイルが、まるで舞台女優のように堂々と立ち振舞つている。

そのことを、誰も疑問に思はないのだろうか。

「この素晴らしい場に水を差してしまつたことを心よりお詫びいたしますわ。道ならぬ恋に燃える若き男女にどうか祝福を。宴はまだ始まつたばかりですもの。——思う存分、楽しめて？」

このふたりで。

「お願い、ちょっと待つて——」

コンスタンス・グレイルなら必ず謝罪を受け入れるはずだ。予想通り、彼女はちらりとパメラを見た。けれど、見た、だけだつた。

パメラに気がついたコンスタンスは、わずかに目を眇めるとすぐに顔を背けてしまつた。それは謝罪など許さないというような激昂した態度ではない。むしろ、うつかり羽虫が視界に入つてしまつた。そんな表情だつたのだ。そこで初めてパメラは気がついた。この女は、誰だ。

これは、パメラの知つているコンスタンス・グレイルではない。

「あら、わたくし眩暈が。その孔雀青のベストがよくお似合いな方——ええ、あなたですわ。あなたのがくましい腕を、少しだけお借りしてもよろしいかしら？ 心が痛くて、ひとりで歩けそうもないのです。すぐそこまでですわ。外に迎えが来ているはずなので」

顔は平凡なのに、そこに乗せられた表情はひどく艶めいていた。信じがたいが、そうしているとあの地味な女がたいそう魅力的な女性に見える。実際コンスタンスに選ばれた男はわずかに相好を崩し、それからパメラに蔑むような一瞥を寄越した。

「もちろんです、レディ」

——負けた。女として、コンスタンスに負けた。それは、パメラにとつて体が震えるほどの屈辱

だつた。

「それでは皆様、ごめんあそばせ」

コンスタンスは背筋を伸ばしたまま優雅な仕草でゆつたりとした裾^{すそ}を摘^{すく}み上げる。それから流れれるように頭を下げる。

あまりに自然で非の打ちどころのない淑女の礼は、パメラでさえも一時の激情を忘れてしばし見惚れるほどだつた。

コンスタンス・グレイルは立ち去り、いつの間にか中断していた樂士たちの演奏が再開される。それは、宴の終わりを告げるような物悲しい小夜曲^{セレナード}だつた。

パメラはいよいよ抜き差しならない事態になつていて。誰も彼もがパメラを非難しているような気がした。視線を感じる。じろじろと見られている。負けるものか。顔を上げて、何でもないようになり過ごそうとする。けれどやはり内心では恐ろしかつた。

だから、その場に見知つた顔を見つけていた時は思わず飛びついていた。

「ホランド夫人！」

ふくよかな女性が驚いたようにこちらを見る。ホランド夫人なら大丈夫だ。守つてもらえる。

社交界デビュート^{デビューティ}した日から今まで、彼女はパメラのことを娘のように可愛がつてくれていた。

「助けてください、騙^{だま}されたのです。運命の三女神^{モーリア}に誓つて、私はこんなこと致しません。夫人な

ら、信じてくださいますでしよう？」

誤解なのだと傷ついた表情を作り、縋るよう見つめる。お優しいホランド夫人なら、これで充分のはずだ。肩を抱いて、かわいそうに大変だつたわね、そう言つてくれる。

パメラの予想通り、ホランド夫人は微笑んでいた。パメラもほつとして笑顔を返す。けれど、次の瞬間凍りついた。

「ごめんなさい。あなた、どちら様だつたかしら？」

ひゅつ、とパメラは息を呑んだ。

優しかつたはずの夫人の瞳が、ひどく慟^{だら}しそうに、歪^{ゆが}んでいる。

立ち尽くしていると、どん、と誰かがぶつかってきた。パメラはよろめいて尻^{しり}もちをつく。そのわずかな間にホランド夫人はどこかへ行つてしまつた。

あらごめんなさいね、平然とした口調で謝罪したのは扇子で口元を隠した貴婦人だつた。ダーケ・ブロンドの髪を結いあげた細身の女性は、確かに、エマニユエル伯爵夫人と名乗つていたか。コンスタンス・グレイルと交流のあつた人物だ。思わず身構える。

案の定、伯爵夫人は立ち去らず、一方的にパメラに話しかけてきた。

「—— 私ね、グレイル嬢のことを本当に歓迎していたのよ。特筆することのないつまらない子だけれど、悪い子ではないもの。グレイル流に言うと誠実つてやつね。それつてこの世界ではとつても珍しいことなのよ。わかるでしよう？ だからあなたのやつたことはちょっとだけ腹立たしいわね。そう、ちょっとだけ。まあ、でも、結果的に面白いことになつたから許してあげる」

そう言つて、起き上がるのできないパメラに手を差し伸べてくれる。「だつて、私が何もしなくて、あなたとワルツを踊りたい方々が手薬煉てくすねを引いて待ち構えていいみたいだもの」

はつと気づいて辺りを見渡せば、パメラはたくさんの人間に囲まれていた。ひとつそりと流れていた曲がふいに転調する。広間に明るく鳴り響いたのはテンポの速い三拍子のメロディ——円舞曲だ。さつとパメラは青ざめた。くすくすと笑い声がさざ波のように寄せては引いていく。はしゃいだようにこちらを覗き込んで来るのは、いずれもある程度の年齢の者たちだつた。パメラと同年代の者はいつもと違う夜会の空気に萎縮し、いつたい何が起こつたのかと遠巻きに見つめているだけ。当然だ。

こんな、こんな夜会は、パメラだつて知らない。

パメラにとつて夜会とは、ひどく退屈で模範的なものだつた。悪口も嫌がらせもおままでとのようく可愛らしく、それならば平民の男たちとつるんで下町の怪しげな酒場で遊ぶ方がよほど刺激的だつた。だからこの計画を実行したのだ。この程度の奴らなら手玉にとれると、そう思つたのだ。

伯爵夫人はすれ違いざまに、パメラの耳元で低く囁いた。

——私の故郷ではね、盗人は焼けた靴を履かされて死ぬまで踊り続けるのよ」

※

「ああ、始まつた始まつた」

「懐かしいわね」

「十年ぶりだ」

「どのくらいもつかしらね、あの子たち」

「あら、せめて私の番までは元気でいてもらわないと」

「昔から宴の醍醐味だいごみだつたものね。でも、本当に久しぶりだわ。この十年、みんな気が引けていたから」

「悪目立ちして処刑でもされたらごめんだからな」

「ええ、十年前みたいにね」

「あれはひどかった」

「しつ。だめよ、口にしては」

「でも、それにしても驚いたな。あれはまるで——」

「ええ、まるで——」

「——まるで、スカーレット・カステイエルが地獄の底から舞い戻ってきたみたい」

第二章 希代の悪女と平凡な少女

コニーが目を覚ますと、陽はすでに高く昇っていた。柔らかな光に、澄んだ空氣。窓の向こうではチチチチ、と小鳥が歌っている。

何だか怒涛の夢を見た、ような、気がする。そう、まるで、パメラ・フランシスをぎやふんと言わせたような――

(いやいやいや、さすがにそれはあり得ない)

だって相手はあるのパメラである。

コニーは目を瞑つたまま肩を後ろに反らし、思い切り伸びをした。

うん、あり得ない。自分で言うのも悲しいが、コンスタンス・グレイルは地味で冴えない小物なのだ。

物悲しい気持ちになりながら瞼を開けると、目の前に、ひとつのかな顔があつた。

「……ん?」

吸い込まれてしまいそうな紫水晶の瞳に、夜の帳のような髪。

「……ん?」

その外貌は魂を奪われてしまいそうなほど美しい。けれど、同時に猛烈な違和感を覚える。



コンスタンス・グレイル



スカーレット・カスティエル



ニール・ブロンソン

誠実がモットーの十六歳。桜色の髪に若草色の瞳。地味で冴えないバツグンの少女。約束に浮気されても泣きそう。ピンチに助けを求めるなら、僕のもの。僕のものは僕のもの。なんだか記憶力が良さそう!

享年十六歳。永遠の十六歳。黒髪に紫水晶の瞳。セシリ亞王太子妃の暗殺未遂でサンマルクス広場で斬首刑に処された。モットーは、お前のものは僕のもの。僕のものは僕のもの。なんだか記憶力が良さそう。



パメラ・フランシス



ブレンダ



ミーレス

たぶん十五、六くらい。ブラチナブロンドの髪。コニー世代の裸の女王さま。接吻なんて朝飯前なおませさんで、ニールと浮気していた。裕福な男爵令嬢で、人を利用して甚振るのが好き。けっこう自分が散々甚振られる羽目になった。

たぶん十五、六くらい。パメラの金魚の糞。もしくは女王の恐怖政治に脅えていた民衆その一。



ハームズワース子爵



エマニュエル伯爵夫人

たぶん三十代後半くらい。すべての発端となったグラン・メリル=アンの夜会の主催者。膝になる呪いをかけられたのかと思うほど肥えている。ちなみに独身。ものすごい金持らしい。冗談は顔だけにしておいて欲しいが聖職者もある。

たぶん三十代半ば。おっとりしてそうで毒舌。コニーのことはそれなりに可愛がっていた様子。あとなんか故郷が可愛い。

ここは、コニーの寝室ではなかつたか。そう思つて視線をぐるりと巡らせる。見慣れた鳶模様の壁紙に、寝台の横には金の取つ手のついた猫脚のサイドチェスト。二人掛けの長椅子に、脚の短いガラス天板のテーブル。部屋の隅には化粧台を兼ねた引き出し付きの収納机。

そして、窓の向こうには色彩豊かな尖塔が見える。グレイル領は緑ばかりだが、王都は建物ばかりだ。もつとも、社交シーズンが終わる秋口には領地も紅葉やかに染まつてゐることだらうが。いずれにせよ、コニーにとつては例年と変わらぬ王都の風景である。

『やつと起きたのね、コンスタンス・グレイル。お前、昨日は一日中寝ていたのよ?』

けれど、鈴を転がしたような可憐な声は、いつもの朝にはないものだつた。

一拍の沈黙の後、コニーは叫んだ。

「ぎゃああああああああ!」

目の前の少女がぎよつとしたような表情を浮かべて後退る。しかしこニーもまた動搖していた。小宮殿での情景がものすごい勢いで蘇つてきたのだ。それはまるで瞬きをする度に場面の変わる紙芝居を見ているようだつた。

(ちょ、ちょっと待つて――)

映像だけではない。感じるのは、その場の空氣や、温度。それに声や匂い。すべてがあまりにも生々しい。これは、まさか――

「夢だけど、夢じやなかつた――!」

愕然と叫ぶと、不機嫌な声が返つてきた。

『なに言つてるのよ。お前、まだ寝ぼけているわけ?』

いや、意識は、比較的はつきりとしていると思う。目の前にいるこの人は、大広間から温室へと続く廊下で出会つた高貴な方だ、とコニーの記憶は告げてくる。けれど確信がない。やはり寝ぼけているのだろうか。これは、夢、なのだろうか。わからない。だからコニーは恐る恐る訊ねることにした。

「あのう、ど、どちらさま、でしようか……?」

なんにせよ、ひとつだけ言えることがある。整いすぎて近寄りがたい美貌と、洗練された上品な佇まい。蠱惑的な肢体に挑発的なドレス。――そのどれをとってもコニーの知り合いでないことは明白だ。

少女はコニーの問いかけにふくんと目を細めた。紅い唇がゆるやかに弧を描き、よく通る声が飛び出してくる。

『わたくし? わたくしは、スカーレット。スカーレット・カステイエルよ!』

――スカーレット・カステイエル?

「いやいやいや、そんなバカな。だつて、スカーレット・カステイエルは十年前に処刑されていて……」

『やだお前、まさか、わたくしが生きているように見えるの?』

それが心底可笑しいと言うような口調だったので、コニーは思わずまじまじと目の前の少女を見

察した。精巧な顔立ちは確かにこの世のものとは思えないが、おそらく、そういうことではないだろう。顎から首筋にかけての線は華奢で、胸は豊か。腰はほつそりとくびれていて——そして、文字通り地に足がついていなかつた。

なぜか、ふよふよと、浮いている。

それを目にした瞬間、コニーは再び意識を失つた。

『ちょっと寝過ぎよ、お前』

呆れたような声にぼんやりと目を開けると、例の少女が腰に手をあててコニーを睥睨していた。

『それも、わたくしとの会話の最中に眠るなんて……！ そんな失礼な仕打ちをされたのは、生まれてはじめてだわ！』

いやだつてもう死んでるがな。さすがにそつとは言えず、「失神です」と引き攣つた声で答えた。

——紫水晶(アメシスト)の瞳に、オニキスのように艶やかな黒髪。息を呑む美しさ。そのどれもが、かの有名なスカーレット・カスティエルを示す特徴である。言われてみれば、顔立ちも、似ているかもしれない。

といつてもコニーが本物のスカーレットを見たのは十年も前のことだ。それも一度きり。たいそう美しい人だつたという記憶はあるが、実際の顔立ちはおぼろげである。それよりも生まれて初めて見た『処刑』の方が強烈だつた。あれから這う這うの体で家路についたコニーは倒れ込むようにして三日三晩寝込んだのだ。もはやスカーレット・カスティエルという符号はコニーのトラウマの

頂点として君臨している。

「で、でも、なんで小宮殿(グラン・ワールド)に……？ スカーレット・カスティエルの亡靈はサンマルクス広場にいるんじや……？」

首なし令嬢が頭を求めて夜な夜な徘徊(はいかい)しているという噂は王都七不思議のひとつにも数え上げられるほど有名である。そう告げると、スカーレットは怪訝(けげん)そうに首を傾げた。

『サンマルクス広場？ ああ、わたくしが処刑された場所ね。あんなところ、この姿になつてから一度も行つたことないわよ。だいたいわたくし、自分が処刑された日のことなんてちつとも覚えていないもの』

そうなのか。自称・スカーレットの台詞(せりふ)にコニーはほつと胸を撫(なで)で下ろした。あの日、広場は人間の惡意で満ちていた。覚えていないのならば、その方がいいだろう。

『——それに引き換え小宮殿(グラン・ワールド)は、間抜けなエンリケと腹黒セシリ亞に屈辱を味合わされた場所なよ！ まったく、今思い出しても腹立たしいわ！』

「ちよ、王子に向かつてそんな不敬な……！ それに、は、腹黒……！」

聖女アナスタシアの再来と名高い慈悲深き王太子妃様(セシリ亞)になんてことを言うのだ。けれど、暴言を

吐いた当人は気にした素振りもなく話を続けていく。

『とにかく、気づいたら小宮殿(グラン・ワールド)にいたんだけれど、どうしてか広間には入れなかつたのよね。入ろうとしても弾(はじ)かれてしまうの。やっぱり死者には何か制約があるのかしら』

スカーレットは何かを思い出そうとするように首を捻(ひね)つた。

『わたくし、自分がいつからこの状態だったのかよく覚えていないけれど、中に入れたのは、きっと、お前のおかげなんでしょうね。誰に声を掛けても聞こえない。視線だって交わせない。そんな中で、わたくしの存在に気がついたのはお前がはじめてだったのだから』

「スカーレット様……」

『傍かな微笑を浮かべる少女の姿に胸がつまつた。そのまま言葉を失っていると、彼女は「わかつていてる」というように頷いてみせる。

『お前は地味でパツとしなくて特に取り柄もないようだけれど、わたくしに気がついたことだけは存分に誇つてよくつてよ！』

「うん、それちょっと違う」

真顔になつて否定した。今のは特にそういう意味での沈黙ではなかつた。ついでに思い出す。あの時、小宮殿^{グラン・メリルアン}の大広間にいる直前、少女は確かにこう言つたのだ。

——お前、礼を言うわ。

よくわからないが、コニーが声を掛けたことで少女は広間に入ることができたらしい。なるほど、とひとまず納得したが、それでもひとつ疑問が残る。

「でも、なんだつて我が家に——」

ついてきたのだろうか。

広間に入るという目的を果たしたのだから、後はそのままどこへなりと行けばいいと思うのだが。疑問が顔に出ていたのか、自称・スカーレットは半眼になると腰に手を当てコニーを見下ろして

きた。

『だつてまだ対価をもらつていないもの』

『たいか？』

『あら忘れちやつたの？ 対価もなしに、赤の他人を助けるわけがないでしよう？』

そう言つて、ふふ、と笑う。その顔に浮かぶのは、獲物を追いつめるような、ひどく獰猛^{じうもう}な美しさだ。その瞬間、脳裏^{のうり}にひとつの中が蘇つた。

——いいわ、助けてあげる。でも、その代わり——

ふいに冷水を浴びせられたように血の気が引いていく。あの時、声は最後まで聞こえなかつた。けれど古今東西、異形のものとの契約の対価と言えば——命、が定番ではないだろうか。コニーは身震いする体をぎゅつと抱きしめ、声を振り絞つた。

「き、聞こえなかつたんです……！」

『は？』

「ほ、本当に、聞こえてなくて！ 何が起こつたのかもわかつてなくて！ だ、だから命は……！」

どうか命だけはご勘弁を——そう言つて縋りつくも、少女はけらけらと愉しそうに囁うだけだつた。

『だーめ』

絶望に視界が真っ暗になる。じわり、と瞳に涙が滲んだ。

（ああ父様、母様、先立つ不孝をお許しください——）

持つて生まれた容姿^{ようし}のようにパツとしない人生でした。コニーは肩を落としてがっくりと頑垂れた。

スカーレット・カステイエルが、圧倒的な存在感を纏つてコニーに近づいてくる。嗜虐的な笑みを浮かべたその姿は、噂に違わぬまさに希代の悪女そのものだ。

『助けてあげたのだから嫌とは言わせないわよ』

この時、おのれ哀れなコンスタンス・グレイルは、三女神の末子アントロポスが人間の運命の糸を断ち切るよう、スカーレット己おのれもまた希代の悪女スカーレットによって死後の世界に連れて行かれるのだとばかり思っていた。

『いいこと、コンスタンス・グレイル』

ぎゅっと目を瞑つて覚悟を決める。けれど待っていたのは終焉しゆうえんではなかつた。

続く未来は、コニーの予想とはちょっとばかり違つていたのだ。

『――お前のこれから的人生をかけて、わたくしの復讐ふくしゅうを成功させなさい！』

思いもよらない言葉にコニーはぱちくりと目を瞬かせた。

「……復讐？」

スカーレットは紫水晶アメジストの双眸そうぼうに燃えるような怒りを湛えてこちらにじり寄つてくる。

『ええ、そうよ。わたくしを処刑に追い込んだ不届き者ふとくしゃどもをひとり残らず地獄に落としてやるのよ――』

「そ、それは」

ただならぬ気配に気圧けおされて、コニーは、一步、後退あとずさつた。ぐくりと唾つばを呑み込む。

「いつたいどこのどちら様方さまがたで……」

そう簡単に是はいと頷くわけにはいかない。復讐の相手が誰かもわからないのだ。事と次第によつてはコニーだけの問題では済まなくなる可能性だつてあるだろう。

『知らないわよ』

「へ？」

『だつてわたくし、嵌められたんだもの。あの小娘セシリアに毒を仕込んだ罪で処刑されたけれど、そんな地味なこと、このわたくしがするわけないじゃないの』

スカーレットはそう言うと、不愉快そうに瞳を眇めた。

今なんと？ コニーは思わず言葉を失い、たつた今とんでもない発言はつげんをした相手を見つめる。身に覚えのない罪での処刑。

――それは、つまり、冤罪えんざいというのでは？

『だからね、コンスタンス。お前の役目はわたくしの手足となつて真犯人を見つけ出し、そいつらに生き地獄いきじごくを見せてやることよ！』

なんてことだ。心臓が早鐘を打つた。コニーは、今の今までスカーレット・カステイエルは悪だと信じていた。信じ切つていた。愚かにも、まことしやかに流される噂うそなんかによつて！

「じゃあセシリア妃の生家に圧力をかけて一族郎党土下座させたつていうのも嘘うそだつたんですね……！」

これほどの美貌の持ち主だ。さらには王家も降嫁してくるような大貴族であるカステイエル公爵家の血統を持ち、王太子殿下の婚約者ときたら彼女のことを妬む者は多かつただろ。おそらく、おそれ、

そういった負の感情がこんなひどい噂を作り出したのだ。スカーレットは常に孤独だったに違いない。せめてコニーだけは本当の彼女を見つけて理解してあげなければ——ぐつと拳を握りしめ、気遣うように微笑みかけば、スカーレット・カステイエルはきょとんとした表情を浮かべていた。

『え？ やつたわよ？』

『……はい？』

『なによ』

「……い、いえ。え、ええと、そしたら権力にも言わせてセシリア妃を不敬罪で投獄したっていふのは——」

『あつたわね、そんなこと。あの女、全然懲りてなかつたけど』

「……その、赤ワインぶつかけて舞踏会の最中にドレスを脱がしたやつは『下着を脱がしたわけじゃないんだから別にいいじゃない』

「……公衆の面前での全力往復ビンタ……」

『それの何がいけないの？』

コニーは思わず息を吸い込んだ。

「色々やつてるじゃないですか？』

『なによ、別にたいしたことないじゃない』

「充分たいしたことです！ 確かに処刑にはならないでしようけど、普通に捕まつてもおかしくあ

りませんよ！』

『なんですか？ お前、わたくしを誰だと思っているのよ！』

きつと眦まなぢが吊り上がり、囁ささみつくように一喝される。

「ひつ、スカーレット・カステイエル様ですごめんなさい！』

『そうよ！ わたくしは偉いのよ！ たかが子爵家の小娘をちょっと小突こづいたくらいなんでもないのよ！』

「いやでもけつぎよく処刑されてるし！』

——あ、しまつた。

滑らせてはいけないところで口を滑らせるのは、コニーの悪い癖くせである。さあつと血の気が引いていく。あまりの恐怖にスカーレットの方を見ることができない。視線を逸らしながら、それでも、最後の力を振り絞つて口を開いた。

「あ、あのやつぱり復讐のお手伝いは——」

よくないと思うんです。

けれど渾身こんじんの訴えは声になる前に一蹴された。

『——借金』

それはまるで、凧こわねいだ海のように穏やかな聲音だった。

『この家、借金があるんでしょう？ これからどうするの？ 婚約破棄なんてしちやつてしない。コニーはしてない。やつたのは目の前の女王様である。』

しかし、結果だけ見れば全く以つてその通りだつた。今回の一件でプロンソン商会の後ろ盾はなくなつた。グレイル家は外聞と婚約者を捨て、恥と借金だけを残したのである。

コニーは悄然と肩を落とした。考えれば考えるほど己の首が絞まつていく気がしてならない。『助ける方法がないわけではなくてよ』

その言葉に、ぱつと顔を上げた。よほど縛る^{すが}ような表情をしていたのだろう。スカーレットが愉しそうに目を細める。

『わたくしの復讐に、協力、するわよね?』

「う……」

『それに、まさかとは思うけれど、誠実のグレイルが受けた恩を返さないなんて——そんな不誠実なこと、あるわけないわよね?』

『なにをすればよろしいでしようか』

反射的に返事をすれば、希代の悪女はにんまりと口の端を吊り上げた。

試読版をお読みいただきありがとうございます。
ここからは製品版「エリスの聖杯」でお楽しみください！